

News Letter

今回の2枚の景観(写真)は、東京本社から1時間足らずの場所です。私は、会社の仕事のほかにも、地元の博物館ボランティア関連の調査に関わっており、過密都市と言われている京浜地方の自然は、複雑であると改めて思います。例えば平野は、洪積台地と沖積低地が何重にも入り組み、それらの境界に崖線林があり、大河川には草地や干潟が見られます。クヌギ・コナラの残存も多く、特に、丘陵・台地の谷間に湧水を伴う湿地や水田がある所は谷戸(東関東では谷津)と呼ばれ、異なる環境がセットで存在しているため、生物相が多様です。

ここでは、水辺・雑木林・草原の真夏の昆虫に、1種づつ登場してもらうことにしました。但し、あまりに平凡なものは除きました。

一般人の心象風景から小動物の記憶の多くが失われた現在、ヤブヤンマやカトリヤンマなどの多くのヤンマが夕方に飛ぶということも、忘れられつつあります。樹液に

…昆虫の視点から… 郊外の自然誌



夕暮れの谷戸風景と昆虫達

ヤブヤンマは生時眼の空色が鮮やか(川崎市生田緑地産)。アカアシオオアオカミキリは金属光沢があり、特有の香りを放つ(写真は山梨産だが、東京付近でも古い雑木林に生息)。(写真撮影・デザイン 雑倉正人)

来る甲虫等も、白昼はむしろ少ないもので、ここに紹介したアカアシオオアオカミキリのように、専ら夜間に現れる種がいます。これらはその生態を知らなければ、私たちのすぐそばにいても、存在すら気づかれない生物といえますが、一定の条件を満たす水環境や林分があれば、毎年姿を見せてくれることは、喜ばしくもあります。

河川は、草地が安定して維持されており、特有の昆虫が見られる場所です。蝶類を例にとると、ミヤマチャバネセセリやギンイチモンジセセリによ

うに、丘陵より河川敷に多いものがあります。食草のススキ等はどこにでもあるのですが、植物種以外の何らかの立地条件が必要なのでしょう。

このように昆虫は、身近なものでも、多様で奥が深い生物といえます。それらを対象とする環境調査の仕事では、限られた時間に一通りの分類群を網羅することが要求されます。そのため、スウィーピングなどの、そこに止まっている個体をむりやり出す採集法を多用せざるをえない場合がありますが、自然を深く知るには、網に入った昆虫がなぜいるのか、疑問を感じて思い返すことが必要です。その場合、前述の観察者の目が土台になるでしょう、と私としては考えます。

(東京本社自然環境研究室・雑倉正人)



多摩川とミヤマチャバネセセリ

信州などでは高原で見られるが、ここでは平地の蝶で年3回発生する(特有の白い紋で同定する)。(写真撮影・デザイン 雑倉正人)

目次

| | | | | | |
|------|--------------------|---|------------|--------------------------|---|
| エッセイ | 郊外の自然誌 - 昆虫の視点から - | 1 | Suggestion | 昆虫で環境を表現してみませんか? | 5 |
| 調査 | 魚類の調査道具 | 2 | 研究紹介 | 都市空間におけるチョウ類群集 | 6 |
| マンガ | 調査員物語 | 4 | | ある日のフィールドノートから それぞれのそれなり | 8 |